

アブラハムの生涯における

「レフ・レハー」(לֵךְ־לְךָ)の意義

ベレーシート

●今回の連盟全国牧師会の「靈性の回復セミナー」では、イスラエルの信仰の父と言われるアブラハムを取り上げます。神がアブラハムに命じた「レフ・レハー」(「あなたは行け、あなたは旅立ちなさい」)の意義について、神の永遠のご計画の視点からその意味するところを考察したいと思います。アブラハムに対して神が命じた「レフ・レハー」(לֵךְ־לְךָ)のフレーズは、創世記 12 章 1 節と同 22 章 2 節に登場します。最初はアブラハムの召命の時であり、もう一つはアブラハムにとって信仰の最大の試練となる時に語られています。アブラハムの信仰の生涯は、まさにこの二つの「レフ・レハー」に囲まれた漂泊の旅と言っても過言ではありません。まずはアブラハムの召命の聖書箇所を読みたいと思います。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 12 章 1～3 節

- 1 【主】はアブラムに仰せられた。
「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」
- 2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。
あなたの名は祝福となる。
- 3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。
地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

●今回のテキストの一つとなる創世記 12 章 1～3 節は、昨今、きわめて注目度の高いテキストとなっています。しかし多くの場合、その注目点が 2～3 節の「あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族はあなたによって祝福される」という部分に偏っていて、なぜか 1 節の扱いが希薄であるように思います。2～3 節は、1 節の「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」という主の命令に附随するかたちとして置かれています。それゆえ、ここでは 1 節にのみフォーカスしたいと思います。

1. 「わたしが示す地とは」

(1) 創世記 12 章 1 節の重要性

●まずは、12 章 1 節のヘブル語原文の文法情報を整理しておきたいと思います。

【新改訳改訂第3版】創世記 12 章 1 節

【主】はアブラムに仰せられた。「**あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが(あなたに)示す地へ行きなさい。**」

●原文の「レフ・レハー」(לֵךְ-לְךָ)の「レフ」(לֵךְ)は「行く」を意味する「ハーラム」(לָךְ)の命令形(2 単男)です。「レハー」(לְךָ)を直訳すると「あなたに関しては」「あなたについては」となりますが、ここは「あなた」ということが強調されています。

●それは、「あなた」という言葉が原文の 1~3 節の中になんと 12 回も使われていることから分かります。まさに神の召命は「あなた」であるアブラム個人にかかっていると言っても過言ではありません。

●1 節では、アブラムが、(1)「どこから」、(2)「どこへ向かって」旅立つべきかが命じられています。

Gen 12:1
 アヴラーム エル アドナイ ヴァヨーメル
 וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל-אַבְרָם
 レハー レフ
 לֵךְ-לְךָ
 メーアルツェハー
 מֵאֶרֶץ
 ウーミンモーラドゥテハー
 וּמְמֹלַדְתֶּךָ
 アーヴィーハー ウーミツベート
 וּמִבֵּית אָבִיךָ
 アルエッカー アシエル ハーアーレツ エル
 אֶל-הָאָרֶץ אֲשֶׁר אֶרְאֶךָ

(1)「どこから」の「から」(from)を示すヘブル語の前置詞は「ミン」(מִן)ですが、省略されて「メー」(מֵ)、あるいは「ミ」(מִ)で表されています。

- ①「あなたの地(国)から」(「メーアルツェハー」 מֵאֶרֶץ)
- ②「あなたの親族から」(「ミンモーラドゥテハー」 מִמְּמֹלַדְתֶּךָ)
- ③「あなたの父の家から」(「ミツベート・アーヴィーハー」 מִבֵּית אָבִיךָ)

●①と②で「あなたの生まれ故郷を出て」と訳されます。ここは新改訳・新共同訳とも「二詞一意修辭法」で訳していますが、口語訳は「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。」と訳しており、前置詞の「ミン」(מִן)を「出て」「別れ」「離れ」と内容によって訳し分けています。

●創世記 12 章 1 節において重要なことは、「どこから」「どこへ向かって」旅立つのかということです。後者の「どこへ」とは、「わたし主が(あなたに)示す地に向かつて」(エル・ハーアーレツ・アシエル・アルエッカー)です。ところが、意外とこのことの重要性に気づかずにいることが多いのです。この「地」の着地点は、創世記 12 章では示されていません。「わたしが(あなたに)示す」の「示す」と訳された動詞は、「ラーアー」(רָאָה)のヒフィル(使役)態の「示す、教える、啓示する」の 1 人称男単、2 人称接尾辞です。主がアブラムに示される地がどの地なのかは、アブラムが主のことばに従って旅立つことがなければ分かりません。ですから、ヘブル人への手紙には「信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました」(11:8)と記されているのです。

(2) 「わたしがあなたに示す地」とはどこなのか

●「わたしが示す地」とは一体どこなのでしょう。これが今回のセミナーにおける最も重要な問いかけです。原文では「わたしがあなたに示す地」となっており、その「地」には冠詞がついています。つまり、いろいろな個々の場所ではなく、ある特定の地と考えられます。その特定の地とはカナンカナンの地なのでしょう。いずれにしても、その地は神のご計画においてきわめて重要な場所であるに違いありません。アブラムはカナンカナンの地に入り、さまざまな場所に滞在しながら、漂泊の旅を続けています。最初の滞在はシェケムシェケムでした。そしてベテルとアイの間にある山へと進み、ネゲブ、エジプト、ヘブロン、ゲラル、ベエル・シェバにも滞在しています。アブラムの生涯で最も長く滞在した地はヘブロンです。しかし彼は、モリヤモリヤの地にある「ひとつの山」にも行っているのです。果たして、主の言われる「わたしが示す地」とはいったいどこなのか、カナンカナンの地全体を意味するとも、あるいは、エジプトの川からメソポタミヤのユーフラテス川までの全域とも(創世記 15:18)、あるいは、特定の地(モリヤモリヤの地にある山)とも考えられます。いずれにしても、アブラムに対する神の召命にある「わたしが示す地」とは、「子孫の繁栄」「万民の祝福」

「土地の賦与」の約束と密接に絡みつつ、漸次的に、螺旋的に展開しながら、やがてはメシア・イエシュアによって天と地がつながる「地」(御国)へと着地します。そのことをこれから検証してみたいと思います。



2. 「カルデア人の地ウル」からの旅立ち

●ところで、1節にあるように、なにゆえに「あなたの生まれ故郷から」「あなたの父の家から出て」なのでしょう。

(1) カルデア人の地ウルから出て

●使徒の働き 7章には「・・私たちの父アブラムが、ハランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました。そこで、アブラムはカルデア人の地を出て、ハランに住みました。・・」(7:2~4)とあります。

●下線の「カルデア人の地」という表現は、旧約聖書では「カルデア人の地ウル」でしばしば出てきます。聖書の言う「カルデア人」とは「バビロンの王」を意味します。アブラムの漂泊の旅はバビロンの王の支配にあった「ウル」から始まっています。

●ちなみに、創世記 10章に登場する地上で最初の権力者となったニムロデは、ハムの子孫です。「彼の王国の初めは・・みな、シヌアルの地にあった」(創世記 10:10)とありますが、「シヌアルの地」というのは今日のメソポタミヤ平原のことです。そこはチグリス・ユーフラテスの二つの大河の下流域にある「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる広大な平野です。アブラムが生まれたウルもそのメソポタミヤ平原にある古代

都市の一つでした。この地は「シュメール」とか「アッカド」の地とも言い、かつ「バビロン」の地名で呼ばれることもあるようです。そこはハムの子孫たちが支配するところでした。「最初の権力者」であった「ニムロデ」(נִמְרוֹד)の語源はヘブル語の「マーラド」(מַרְדֵּ)で、「反逆する」という意味をもっています。何に反逆するのかと言えば、神に対して反逆するのです。その金字塔が「バベルの塔」でした。

●創世記 11 章 2～9 節の箇所には、シヌアルの地に定住したハム系の人たちが塔を建てようとした意図が記されています。その意図とは、「われわれの名を上げる」というものでした。「名を上げる」とは自分たちの力を誇示することであり、明らかに神に対する反逆を意味する行為でした。その行為の象徴が塔を建てることだったのです。しかし、神が「ことばを混乱させ」たことで、彼らの思いが実現できないようにしたのです。それゆえ、その町の名は「バベル」(バビロン)と呼ばれました。

●自分たちの力によって他の町に住む者たちを略奪し、その支配を拡大して行くのがハム系の人々の特徴です。そうした神に反逆する者たちの住む地から出るようにと、神がアブラムに命じたのが「あなたの生まれ故郷を出て」という召しの言葉です。使徒の働き 7 章 2～4 節には、「栄光の神が彼(アブラム)に現れて、『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました」と記されていますが、創世記ではアブラムではなく、父のテラが息子アブラムや孫のロトを連れてウルを出たかのように記されています(11:31)。このことについてとても興味深いところですが、今回のセミナーの主旨から逸れるので割愛したいと思います。

(2) 「あなたの父の家」を出て

●「あなたの父」とは「テラ」(原文は「テラハ」תֵּרָח)のことです。この「テラ」について、聖書は重要な情報を主のことばとして、以下の箇所に記しています。

【新改訳改訂第3版】ヨシュア記 24 章 1～2 節

- 1 ヨシュアはイスラエルの全部族をシェケムに集め、イスラエルの長老たち、そのかしらたち、さばきつかさたち、つかさたちを呼び寄せた。彼らが神の前に立ったとき、
- 2 ヨシュアはすべての民に言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラムアブラハムの父で、ナホルの父でもあるテラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。・・・』

●ここでヨシュアが語った「テラ」についての情報はきわめて重要です。なぜ主がアブラムに対して「あなたの父の家を出て」と語らなければならなかったのか、その必然性をここに見ることができます。「ほかの神々」がどんな神であるかは記されていませんが、**主なる神**でなかったことは確かです。つまり、テラは主なる神を知ってはいなかったということです。アブラムの父テラとの訣別は、アブラムが単に父から独立するというレベルの話ではなく、偶像に仕える父とは完全に訣別して、主である神のみを信頼していく信仰の冒険のチャレンジであったと言えます。「父の家を出ること」は、「偶像からの完全な訣別」を意味します。ここに神の召命の厳しさがあります。しかし私たちは「偶像」の実体(本質)について無知であることが多いのです。神の歴史の中で、神を信頼することと偶像に頼ろうとすることとの戦いは常に

繰り返されていきました。それは今日においても変わりません。神を信じることは理論的に説明されることではなく、常に、流動的です。信じているようで、信じていないことが露見し、信じざるを得ない出来事が起こって来ますが、だからと言って神を真に信じていることにはならないという葛藤が常に繰り返されていきます。まさにアブラムの生涯は神を信じる旅を漂泊し続けていると言えます。

●アブラムが神からの召命にあずかった時点で、主の御名を知っていたのはアブラムだけであったということです。何という超・マイノリティー(少数派)でしょうか。人は自分と同じくする者たちが多くいることで安心するものです。ところが、アブラムの場合、主の御名を知っている者が自分の周囲には皆無といっても良い状況です。自分を支えてくれるような、励ましてくれるような仲間はいない状況の中で、アブラムは見知らぬ地への信仰の旅を命じられたと言えます。

●イエシュアも弟子たちに、「**小さな群れよ。恐れることはない。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。**」(【新改訳改訂第3版】ルカ 12:32)と言われました(「小さな群れ」という語彙はこの箇所のみ)。主のご計画に参与する者たちは、このイエシュアのことばをしっかりと心に据える必要があるように思います。イエシュアがあえてそのように言われたのは、私たちがマイノリティーであることを恐れ、それを恥じることを見越しているからです。ですから、主を信じることは相当の覚悟が要ることなのです。主はそのことを承知の上で、アブラムという一人の人物に神の永遠のご計画を担わせられたのでした。私たちも、そうした重みをもって主が私たちを選び、召し出されたことを信じなければならないのです。

●ひとつここで気になるのは、アブラムが主の召しに従ったとき、なにゆえロトと一緒にいくことを許したのかということです。これからのロトはアブラムにとってどのような存在となるのか、果たして一緒に歩むべき者であったのかどうかということです。やがてアブラムは信仰の父と呼ばれるようになりますが、アブラムについて行ったロトの存在は消えています。ロトの生涯において、「主を知る」ことはありませんでした。超・マイノリティーの状況では、アブラムにとってロトの存在はきわめて微妙な立ち位置にあります。ロトはアブラムにとって何ら頼りになる存在ではありませんでした。ロトを連れて行ったのはアブラムの失敗と解釈する人もいるほどです。しかしそのロトを通して、アブラムは信仰の道を歩み上で学んだことも多いとも言えるのです。これはすべてを相働させる神の主権的恵みと言えるでしょう。

(3) ヘブル人と呼ばれたアブラム

●創世記 14 章で、カナンに移り住んだアブラムが初めて「ヘブル人」と呼ばれています。なにゆえに、彼は「ヘブル人」と言われたのでしょうか。「ヘブル人」という語彙の初出箇所は創世記 14 章 13 節です。「ヘブル人」はヘブル語で「イヴリー」(עִבְרִי)と言い、その語源は動詞「アーヴァル」(אָוַר)から来ています。「アーヴァル」とは「(川を)渡る」という意味で、「ヘブル人」とは「川を渡ってきた者」という意味があるのです。確かにアブラムはハランで主のことばを聞いて、ユーフラテス川を渡って来た者です。また、それに加えて、バビロン(カルデヤ人)の支配から逃れ、偶像の文化と決別し、神の世界、御国の世界に渡

って来た者という意味でもあるのです。

●「ヘブル人」とは、「ヘブル人」という人種のことではなく、この世において主にのみ信頼して歩む者を表わしていると言えます。異邦人である私たちは、この「ヘブル人」と言われたアブラハムの信仰に接ぎ木された存在です(ローマ 11 章)。昨今、「ヘブル的視点から聖書を読み解く」ということが言われ始めていますが、本来の「ヘブル人」には、単に「川を越えて渡って来た者」という次元を越えた意味が隠されています。したがって人間中心の考え方から、神中心の考え方へ生き方を変えることを意味します。それは、自分の心のサプリメントとして神のこぼれを摂取するのではなく、神には神ご自身のなさりたいご計画があるのだという視点から神を知り、神を求めていく生き方です。それは聖書の読み方を完全に変わってしまうほどのシフト転換を意味します。

●アブラム自身が自分を「ヘブル人」と称したのではなく、聖書が彼を「ヘブル人」と称しているのです。この事実はきわめて意味のあることだと信じます。それは、ヘブル人であるアブラムにかかわるすべての事柄、彼とかわる人物の名前、彼が滞在する地名などが、すべて意味を持つようになってくるからです。つまりヘブル人と呼ばれたアブラムとかわる人々や地名の中に、神の重要なメッセージが秘められているということです。

●聖書にはユダヤ人と異邦人の区別しかないように、この世界には神を中心とする世界と、人を中心とする世界しかありません。アブラムが川を渡ったことは、人間中心の文化から神中心の文化へと渡って来たことを意味します。神を中心とした世界にあって、神に従うことによって初めて神のご計画を実現する者となり得るのです。彼の生涯はそのためのものであり、神のご計画の目的を実現させる信仰の旅(漂泊)を背負わされたと言っても過言ではありません。

(4) アブラムを祝福した「シャレムの王であり祭司」のメルキゼデクに隠されている意味

●14 章の後半で、アブラムは「シャレム(=サレム)の王メルキゼデク」から祝福を受けています。「シャレム」(「シャーレーム」 שָׁלֵם)とは「平和」を意味する地名であると同時に、後の「エルサレム」の雅名です。さらにはこの「シャレム」は神のご計画を完成するという意味をも含んでいます。そしてそれにふさわしい「メルキゼデク」という名前の意味は「義なる王」で、「王」を意味する「メレフ」(מֶלֶךְ)と「義」を意味する「ツエデク」(צֶדֶק)の二つの語彙が合成した名前です。ちなみにこの二つの語彙が合成すると、「メレフ」が変化して「マルキー」(連語形)となり、「マルキー・ツエデク」(מַלְכֵי צֶדֶק)となります。

●何の前触れもなく登場した「シャレム(=サレム)の王メルキゼデク」は「いと高き祭司」でもあり、アブラムを祝福するために「パンとぶどう酒を持って来た」とあります。メルキゼデクは「いと高き方」(「エール・エルヨーン」 אֱלֹהֵינוּ)によって、エラムの王ゲドルラオメル率いる連合軍を打ち破ってロトを救出し、帰還するアブラムを出迎えます。その際、彼はアブラムが勝利できたのは、「いと高き方」があなたに敵を渡されたからだ伝えてから、「いと高き方」の名によってアブラムを祝福します。

●「アブラム」(אַבְרָם)という名前は、神によって「(名を)高くされる父」という意味であり、創世記 14 章で、アブラムが「いと高き方」の名によって自分を祝福する者に出会ったことは大きな意義があります。祝福するということは上位の者が下位の者に対してなす行為であり、祝福を受けるとは下位の者が上位の者から受け取ることを認めることを意味するからです。そしてアブラムは王であり祭司であるメルキゼデクに対して十分の一をささげています。これらの一連の出来事を通して、アブラムはある意味において、神の御子イエシュアと出会っているとも言えます。ここでの「いと高き方」(「エール・エルヨーン」 אֱלֹהֵינוּ)とは「御父」である神を示唆し、メルキゼデクは御子を示唆していると言えるのです。

●ヘブル書は、メルキゼデクのことを「父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっている」(ヘブル 7:3)と紹介しています。つまりメルキゼデクは、神の御子であり、王であり祭司、しかも「パンとぶどう酒」で象徴される血と肉をもった御子イエシュアを指し示しています。メルキゼデクと御子イエシュア、両者は同位の立場と役割が重なっています。

(5) アブラムが滞在した地名に隠されている意味

●アブラムは「カルデヤ人の地ウル」、「ハラン」の地を出て、カナン
の地に向かいました。カナンの地でアブラムは右図のようにさまざまな場所を漂泊しています。「カナン」(「ケナアン」 כְּנָעַן)の語源は「カーナ」(כַּנָּה)です。この語は「へりくだる」「征服される」という意味で、これは主にのろわれたノアの子ハムの息子カナンの宿命なのです。カナン(の子孫)は、やがてはセムたちのしもべとなることがノアによって預言されています(創世記9:25)。それゆえカナンの地は、神の民にとって約束の地となり、神はその地を「乳と蜜の流れる地」と呼ばれたのです。カナンの地はやがてイスラエルの民に与えられる相続地となります。ただし、「神から賦与される地」と「わたしがあなたに示す地」とは別の事柄です。



●アブラムがカナンの地で滞在した地は以下の通りです。彼が滞在した地の地名にはそれぞれ隠されたメッセージがあります。しかもそれは主が示される最終の地がいかなる地であるかを予表するメッセージを持っています。そこで、これからアブラムが滞在した地を一つひとつ取り上げてみたいと思います。

①「シエケム」(=「シエヘム」 שֵׁכֶם)

●アブラムは妻のサライと甥のロトを連れて、さらにハランで加わった人々と共に旅立ちました。カナンの地での最初の滞在地は「シエケム」でした。その地の「モレ」の樫の木で主はアブラムに現われ、「あなたの子孫にこの地を



与える」と約束します。アブラムは主のために祭壇を築き、礼拝しました。「シェケム」はイスラエルの歴史においてきわめて重要な場所です。北はエバル山、南はゲリジム山、その谷間にあるのが「シェケム」(שֶׁכֶם)です。後にカナンを占領したヨシュアが全イスラエルの部族をここ「シェケム」に集めて、これまでの歴史を回顧します(ヨシュア記24:1~15)。かつて神とアブラムとが交わした「^{たいまつ}松明の契約」(すなわち、四代目の者たちが、ここに戻ってくるという約束)が成就したのです(創世記15章13~21節)。神のこれまでの導きを語った後で、ヨシュアはイスラエルの民に、どの神に仕えるかを自ら選択するようにと決断を促します。ヨシュアが「私と私の家族とは主に仕える」という有名なことばを残したのもこの場所でした。

●「シェケム」は「肩」「尾根」「分水嶺」をも意味します。申命記11章29節でモーセが「あなたが、入って行って、所有しようとしている地に、あなたの神、【主】があなたを導き入れたなら、あなたはゲリジム山には祝福を、エバル山にはのろいを置かなければならない。」と命じたように、シェケムはまさに神に対する「選択を迫られる場所」だということです。主に仕えるのか、それとも他の神々に仕えるのか、その明確な決断が迫られる場所なのです。アブラムの召命に対する信仰の決断と献身を再度明確に迫られる場所、それがシェケムの地が持っているメッセージだと信じます。

●私たちにとっても、信仰や献身を再確認する霊的な「シェケム」が必要です。厳しくそのことを問いかけられる場が不可欠です。神からの召命に対する決断が現実の生活で折れてしまうことがないように、それを厳しく呼び覚ましてくれるような「シェケム」が必ず置かれているはずで、そのことがあって初めて、次の滞在場所となる「ベテル」に移動することができるのです。

② 「ベテル」(בֵּית־אֵל)の東にある山

●「ベテル」(בֵּית־אֵל)は、読んで字のごとく「**神の家**」という意味です。より正確に言うならば「**神と人がともに住む家**」と言えます。後にヤコブが自分の妻を捜すためにハランに向かう際、石を枕にして寝ていると、天と地を結ぶ梯子の夢を見ました。その夢の中では主がヤコブの傍らにおられて語りかけられたのです。ヤコブはその場所を天に通ずる「**天の門**」だと考え、「神の家」を意味する「ベテル」と名づけたのです。アブラムはベテルの東にある山に天幕を張り、そこでも祭壇を築いて、主に祈っています。

●「神の家」を意味する「ベテル」の東にある「山」にアブラムは滞在しましたが、聖書における「山」は、神の支配、神の臨在を象徴します。ダニエルが見た正夢に、この世の人間が築いた国を一瞬にして砕く「人手によらずに切り出された」、メシアを表わす「一つの石」の話があります(ダニエル2:34)。その一つの石は異邦の国々を一瞬にして打ち砕いた後に、他の山々よりも大きな山となることが預言されています。メシア王国(千年王国)において、「山」はメシアによる神の支配、神の臨在を象徴しています。「神の家」と「山」には、「**神と人がともに住む家は、神の主権によって建てられ、統治される**」というメッセージが込められています。

③ ネゲブ

●アブラムはさらに進んで、南の砂漠地帯である「ネゲブ」(נֶגֶב)に旅をしています。荒野や砂漠は死と隣り合わせの危険な場所ですが、靈的な渇きを経験する場の象徴でもあります。詩篇42篇に「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」とあります。この渇きこそ神を求める者になくしてはならないものです。神の家に住む者たちに主を求める渇きが失われる時、それは靈的な危機と背中合わせです。その渇きが神によって満たされることを選び取るか、それともこの世のものによって満たそうとするかの選択の危機はいつもあります。アブラムはネゲブにおいて飢饉に遭遇し、主の御声を聞くことなく、一時的と思いながらエジプトに逃れます。そこで彼ははからずも妻サライがパロに召し抱えられたことでこの世の富を手にし、神を求める渇きは失われてしまいます。ネゲブはまさに「**神を慕い求めさせる場**」なのです。私たちも簡単に靈的なネゲブから逃れようとしてはならないのです。飢饉はまさにそのテストと言えます。

④ エジプト

●アブラムはネゲブで飢饉を経験し、エジプトに一時逃れました。彼は食糧を求めてエジプトへ行きました。**エジプトは「この世」の象徴**です。確かに、アブラムはそこで予想を超えた多くの富を得ます。しかし同時に、主の召命に応えることが不可能な状況に陥ってしまったのです。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たもの」(Iヨハネ2:16)だとあります。エジプトのことをヘブル語では「ミツライム」(מִצְרַיִם)と表記しますが、「ミツライム」の語源は「ツァーラル」(צָרַר)で、「敵視する」という意味です。エジプトもカナンと同様、ハムの子孫であり、聖書の主なる神に対して常に「敵視する」国なのです。神のご計画ではそうした神に敵対する国々は、やがて鉄の杖を与えられた御子メシアによってことごとく打ち砕かれます(詩篇2:9)。そのようにして神は、光とやみとを最終的に「区別する」のです(創世記1:4)が、「**この世の力であるエジプト**」を軽く考えてはなりません。私たちも「世」に支配されるならば、自分の力では抜け出すことができません。アブラムがエジプトから神によって助け出されたことはただただ神のあわれみです。

⑤ 「ヘブロン」

●アブラムの召命は神のあわれみによって、再度、最初の時点に戻されます。そしてかつて祭壇を築いたベテルにまで帰り、ロトとも訣別した後にヘブロン(חֶבְרֹן)に滞在しています。ちなみに、アブラハムの妻サラはやがてこの「ヘブロン」の地で死にます(創世記23:2)。ちなみに、アブラハムはこの地の北側にあるマクベラの畑地を銀四百シェケルで買い墓地としました。この墓地だけがカナンの地におけるアブラハムの唯一の私有地となりました。

●「ヘブロン」(חֶבְרֹן)の地名が象徴していることは「**交わり**」です。その語源は「ハーヴァル」(חָוַר)で、「一つになる、同盟を結ぶ」という意味です。事実、アブラムはヘブロンでは主の祭壇を築きつつ、周囲の人たち(マムレ、エシュコル、アネルの三兄弟)と盟約を結んでいます(創世記14:13)。彼らはよそ者であるアブラムのために、いのちを賭けた戦いにも同行してくれるような仲間となっていました。この三人の兄弟たちはエモリ人です。ここには**イスラエルと異邦人との美しい交わり**を予表させる「型」があります。やが

て神が建てられる家には、神の民イスラエルのみならず、異邦人も組み入れられるのです。それが「ヘブロン」という地に象徴されているメッセージです。

●モーセの幕屋の幕は11枚の幕をつなぎ合わせて造りますが、5枚と6枚をそれぞれ一つにつなぎ合わせ、さらに、それらを互いにつなぎ合わせて造らなければなりません。その「つなぎ合わせる」という動詞に「ハーヴァル」(הַבְּרִי)が使われているのです。このことはやがてユダヤ人と異邦人がキリストにあってしっかりとつなぎ合わされることで、ともに建てられ、神の御住まいとなることを啓示するものです。その啓示を初めて理解したのは使徒パウロでした。パウロはこの真理に目が開かれて、エペソ人への手紙の中でこの真理を各章で展開しています。私たちもこの真理に目が開かれる必要があります。「ヘブロン」は、このように「**主にある交わり**」を啓示しているのです。

●詩篇122篇3節に「エルサレム、それは、よくまとめられた町として建てられている。」とあります。「まとめられた」とは「結び合わされた」という「ハーヴァル」(הַבְּרִי)の強意形を受動態が使われており、預言的完了形で記されています。「預言的完了形」とは、「終わりの日」に必ずそうなることを意味しています。

⑥ 「ゲラル」と「ベエル・シェバ」

●アブラハムのもとに三人の者が訪れます(創世記18章)。そのうちの一人が主でした。その主が「来年の今ごろ、サラには男の子ができています」と約束します。それからイサクが誕生する前にアブラハムはネゲブの地方へと移り、ペリシテ領のガザの南方にあるゲラルに滞在中、ゲラルの王アビメレクがサラを自分の妻として召し入れるという出来事が起こりました。アブラハムは妻を自分の妹だと言って死の危険を回避しますが、神はアビメレクに夢で現われ、サラがアブラハムの妻であることを知らせ「返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬ」と警告して、返させました。イサクが誕生した後にアビメレクのしもべたちが井戸を奪い取ったことでアブラハムは抗議していますが、アブラハムが主に祝福されていることをアビメレクは知り、神を恐れて平和の約束を誓い合います。この誓いを証拠立てるのが「ベエル・シェバ」(「ベエール・シャーヴァ」בְּאֵר שָׁבַע)です。それは「七つの井戸」という意味ですが、誓いの時にアブラハムがアビメレクに七頭の雌の子羊を与えたことに由来しています。

●「ゲラル」(גְּרָר)とは「反芻する」という意味の「ガーラル」(גָּרַר)に由来します。この地は神を恐れない町で、執拗なほどに暴虐を繰り返していた町です。ですから、このような性格をもったペリシテ人(彼らもハムの子孫)とかかわるためには、柔和さと忍耐が必要です。アブラハムもイサクもこのアビメレクに対して柔和の限りを尽くしています。嫌がらせに遭い、当然の権利を主張できる時にもその権利を主張しないこと、報復しないこと、それが聖書の意味する「柔和さ」です。その柔和さによって、相手に主を恐れさせ、互いの間に平和の約束を交わすようにしています。その象徴が「ベエル・シェバ」(בְּאֵר שָׁבַע)なのです。言い換えるなら、「ベエル・シェバ」は「**信仰のあかしと平和の絆の象徴**」と言えます。これは靈的な「ヘブロン」に住んだ者でなければ得られない祝福です。事実、アブラハムも息子のイサクも、自分のためには決して報復的な争いをしていません。それが相手の執拗な暴虐を止め、相手の態度を変えさせているのです。「柔和な者は地を受け継ぐ」という思想は、こうしたところから生まれていると言えます。

⑦ モリヤの地のひとつの山―「イェルーシャーライム」

- このことについては次の最終の項で取り上げます。

3. 「わたしが示す地」の永遠の目的地

- 「レフ・レハー」が記されているもう一箇所の聖書箇所は22章2節を原文で見てみたいと思います。

アーハヴター	アシェル	イェビドゥハー	エツ	ビヌハー	エツ	ナー	カハ	ヴァヨームル
וַיֹּאמֶר קַח-נָא אֶת-בְּנִיךָ אֶת-יִחִידְךָ אֲשֶׁר-אָהַבְתָּ								
あなたの愛する		あなたのひとり子を		あなたの息子を		さあ連れて行け 神は仰せられた		
ヴェハアレーフ	ハンモーリヤ	エレツ	エル	レハー	ヴェレフ	イツハーク	エツ	
אֶת-יִצְחָק וְלָךְ-לָהָּ אֶל-אָרֶץ הַמֹּרְיָה וְהַעֲלֵהוּ								
そしてささげなさい		モリヤの地		に あなたは 行きなさい		イサク を		
エーラーハー	オームル	アシェル	ヘハーリム	アハド	アル	レオーラー	シャーム	
שָׁם לְעֹלָה עַל אֶחָד הַהָרִים אֲשֶׁר אָמַר אֱלֹהִים								
あなたに		私が命じる		～ところの		山々の		ひとつの上で 全焼のいけにえとして
								そこで

●主はアブラハムに「(あなたは)モリヤの地に行きなさい」と命じます。「モリヤ」(מוֹרְיָה)とは「主が示す」という意味です。「ヤー」(יָהּ)は「主」で、「モーリー」(מוֹרִי)は「教え、示す」を意味する「ヤーラー」(יָרָה)が分詞化したものです。つまり「モリヤの地」とは「主が示す地」、「主の啓示の地」という意味です。その地にある一つの山で、あなたの愛するひとり子イサクを全焼のいけにえとしてささげなさいと、主はアブラハムに命じられたのです。これはアブラハムの生涯における最大の信仰の試練(テスト)でしたが、同時に、神のご計画のきわめて重要な事柄が啓示される場へと神はアブラハムを導かれたのでした。

●山々の中の「一つの山」とは「エルサレム」(「イェルーシャーライム」 יְרוּשָׁלַיִם)のことです。アブラハムはその場所を「アドナイ・イルエ」(יְהוָה יְרֵאֵה)と名づけています。なぜなら、そこは主が特別に注視されている場所だったからです。アブラハムの漂泊の旅の最終目的地は、まさにモリヤの地の一つの山である「エルサレム」(イェルーシャーライム)だったのではないのでしょうか。そのことをアブラハムは信仰によって悟ったと考えられます。なぜなら、その場所こそ神と人とがともに住むことになる永遠に揺らぐことのない御国の中心であり、確かな土台のある永遠の都の中心となるべき地だったからです。22章14節は以下の通り。

イルエ	アドナイ	ハフ	ハンマーコム	シェーム	アブラーハム	ヴァツィクラ
וַיִּקְרָא אַבְרָהָם שֵׁם-הַמָּקוֹם הַהוּא יְהוָה יְרֵאֵה						
イルエ		アドナイ		その		場所の名を
						アブラハムは
						そして～と呼んだ
イエラーエ	アドナイ	ベハル	ハツヨーム	イエアーメール	アシェル	
אֲשֶׁר יֹאמַר הַיּוֹם בְּהַר יְהוָה יְרֵאֵה						
主は見られる		主の		山には		今日 言われている ように
(主の)備えがある (主の)ヴィジョンがある						

●ユダヤ人の哲学者であり、ラビの一人でもあったアブラハム・ヨシュア・ヘシェルは「アドナイ・イルエ」の「イルエ」を「ヴィジョン」と解釈しました。なぜなら、そこは「主がご覧になった」という意味だからです。したがって、「主の山には備えがある」(新改訳)の直訳は、「主の山において主がご覧になる」です。そして主がご覧になっているものをアブラハムは知り、また同じく見たのです。この共観・共感こそが聖書の意味する「愛する」(「アーハヴ」**אהב**)と言えます。そもそも聖書で初めて「愛する」という言葉が登場するのは創世記22章2節です。「あなたの愛しているひとり子イサクを連れて」とあります。アブラハムの信仰の試練は、「愛する」ということがどういうことかを試されたようにも見受けられます。イサクが父アブラハムに従順に従ったように、「神がご覧になっているヴィジョンを知って、私たちもそれを見、それに従い、参与すること」が、聖書のいう「愛する」ことだと言えるのです。つまり、「主の山には備えがある」と訳されている箇所の意味は、「神に従うならすべての必要が備えられる」という意味ではなく、「主の山(エルサレム)には神のヴィジョンがある」ということです。「ヴィジョン」には、神のご計画、みこころ、御旨、目的が含まれます。ちなみに「イエルーシャーライム」の語彙に含まれる「シャーレーム」(**שלום**)は、「完成する、成就する」という意味があります。それゆえ、エルサレムは「**神のヴィジョンが完成するところ**」です。つまり、そこは、神と人とがともに住むという神のご計画が完成する御国の中心となる地なのです。

●すでに述べたように、聖書では「山」は主ご自身の臨在、あるいは、主の支配する国を象徴します。ですから「終わりの日」に成就するメシア王国において、「主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。」(イザヤ2:2)のです。アブラハムはその主の山こそ自分の漂泊の終着地点だと信仰的に悟ったのです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙11章8～10節

- 8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。
- 9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。
- 10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

ベアハリート

●アブラハムの信仰による漂泊の旅は、主が常にご覧になっているモリヤの地の一つの山を見させられる旅でした。そこは神のご計画が完成されるところです。そこを目指す漂泊の旅をするようにと主はアブラハムを召されたと言えるのです。それが、創世記12章1節の「**わたしが(あなたに)示す地へ行け**」という「レフ・レハー」(**לך לך**)が意味することだと考えられます。

●信仰の父アブラハムが、神のご覧になっていた神と人とがともに住む都、堅い基礎の上に建てられた永遠の都(=新しいエルサレム)を信仰によって見たのだとすれば、私たちもアブラハムと同様に、その都を待ち望みつつ、与えられた信仰の旅を全うしなければならないはずです。「**揺り動かされない御国**」の民として選ばれ、召されたことをたえず感謝しながら、絶えず寄り添ってくださる「知恵と啓示の御霊」の助けによって、日々鳥瞰的視点から、「天に宝を積む」歩みを目指すべきことが求められていると信じます。

2017.8.3 靈性の回復セミナー担当: 銘形 秀則